新　刊

□芹沢俊介：**人里の自然**　196 pp. 1995. 保育社. ¥2,300.

自然環境保全にあたって，これ迄のように「貴重な」自然ばかりが貴重なのではなく，「あたり前」の自然も同じくらい貴重なのだという認識が，ようやく市民権を得はじめてきた．先に紹介した「ウエットランドの自然」もそうだが，本書ではもっと身近な道端や田畑や雑木林の自然の再認識をうながそうというものである．こういうところは既に人為の産物であり，「貴重な生物」がいないものだから，簡単に開発の手が加えられ，それがアメニティーの向上に貢献するものと歓迎されやすい，けれどもその陰で多くの「貴重でない生物」が減少し，生物相の単調化をもたらしていることを，タンポポやカエル，耕地整理や公園化を例として理解させようとしている．そういうことをより身近に感じるために，著者が永年行ってきたタンポポ調査の手法も紹介されている．調査や観察のために集団で野外に出ること自体に問題がある，という著者の考えに私も賛成である．何十人もが連なって，スピーカーで解説をガナるような「自然に親しむ会」は，そろそろ卒業にしてほしいものだ．（金井弘夫）

□横浜植物会編：**ヨコハマ植物散歩**　169 pp. 1995. かなしん出版. ¥1,800.

横浜市内の市民の森，公園をはじめ，身近な自然観察の適地を一覧するのに便利な本である。それぞれの地域の見取り図に並木の樹種，主要な樹木の名前と位置，付近で見られる主な植物名（作物も含む），施設や地物が書き込まれており，これに一頁程度の解説が伴う，解説はコース案内も兼ね，植物についてはむしろアッサリと流した感じで，初心者にはかえってとりつき易いと思う．本書を手にして歩けば，自然観察自習の手引きとして役立つように作られている．大人数が行列して解説者がマイクでがなるような「自然観察会」は，そろそろ卒業してもよかろうと考えているので，このような自習手引き書の出現は歓迎である．一人でも少人数のグループでも，あまり自信のないリーダーでも，とにかくこれを頼りに歩けば自然観察にとりつくことができ，その経験から次第に観察を深めるようになるだろう．学校や博物館の野外観察のために，こういう自然観察地図が作られているのを見たことがあるが，それが更に一般化されたもので，各地でこういうものが出現するとよい．（金井弘夫）

□井上　健：**月下美人はなぜ夜咲くのか**　岩波科学ライブラリー 30　109 pp. 1995. 岩波書店. ¥1,000.

送粉の為に行われる動物と植物との関係，特に植物が動物を誘う目的で行っている，匂い，色，花蜜など様々な誘因手段と，それに適応した動物の行動を解説している．題名のようにアマチュア向けに解説したものであるけれど，自身の研究や最近の新しいことも取り入れられていて，植物の生活に関心あるものには，興味を引く内容である．（山崎　敬）

□いがりまさし（写真・解説）高橋秀男（監修）：**日本のスミレ**　247 pp.　1996.　山と渓谷社. ¥2,000.

日本のすべての種類のスミレの写真集である．携帯可能な小冊子として作られている．5年の歳月をかけて，琉球から北海道までの自生地を訪れて撮影した，見事な写真が載せられている．今まで知られているすべての種類と変種が取り上げられ，それぞれの種類や変種は，全形写真，生育の状態，一枚の葉と表と裏の拡大，花の側面と正面からの写真，花柱の上面，側面，下面の拡大写真，必要なものは花喉の紫の条線の走りかたなど，詳細にわたる解剖写真が載せられていて，小冊子にもかかわらず，従来のスミレの写真集には見られなかった充実した内容のものである．長い間スミレの研究を続けておられる浜英助，井波一雄氏や，日本スミレ同好会の方々の知識の積み重ねの基礎があって出来たものと思われ，学術的にも価値がある．日本のスミレの分類体系はまだ十分に解明されていない点もあるので，将来の研究には欠か

せない著書である．

（山崎　敬）

スミレに魅せられた植物写真家が，いくつかの外来品を含む150種類をカラー写真でまとめたものである．花の正面と側面および中心部の拡大写真を主体に，葉や花の変異まで含めて記録している．ほとんどの種類についている超拡大によるめしべの上・側・下面の映像は，おし葉ではもちろん見えず，生品ではおしべに囲まれて見落としてしまう大事な特徴をよく見せてくれ，たいへん啓発される．私もパンジーを学生に観察させたとき，柱頭の断面を作ったら，中が空洞でそこが本当の柱頭であることを知って驚いたことがある．ところどころに観察記事，文学，紀行文などが挿入され，読物としても役立つよう配慮されている．

（金井弘夫）

□薄葉　重：**虫こぶ入門**　251 pp. 八坂書房．￥2,400.

採集していれば，虫こぶや菌こぶに出会うことは少なくない．ヌルデやイスノキのゴールは，むしろその種類の特徴としてとりあげられるが，標本を作るときには虫こぶのような余計なものがついていると敬遠し勝ちである．菌こぶは植物関係者の研究対象となるが，虫こぶの方は植物の人間からはどちらかというと疎遠である．ヌルデの虫こぶを作るアブラムシが，チョウチンゴケの仲間を中間宿主にしていることを，おぼろげに知っている程度である．しかし，生物界の現象がたくさんの種類の相互関係で成立していることを思えば，植物の研究だから植物だけ見ていればよいとは言っていられなくなってきた．花と花粉媒介生物との関係は，近来研究者が増加しており，共進化という単語もゆきわたってきた．虫こぶを作る動物はアブラムシ，タマバエ，タマバチ，キジラミなど，昆虫を主体に多様であり，その複雑な生活史や集団生活における社会構造などが鋭意研究されている．本書はまとめにくい「虫こぶ学」を通覧し，興味を起こさせようと書かれたもので，自然観察の予備知識として知っておいたら有用なことがらがたくさん含まれている．第一章は「虫こぶの文化誌」で，古来から知られた虫こぶに関するトピックや利用のはなしが紹介される．第二章は「虫こぶの生物学」で，こぶの形成の仕組み，それにかかわる生物などが紹介されている．第三章は「虫こぶ観察ノートから」の表題で，著者の数々の体験や観察が披露されており，この章が一番生き生きしている．最後に観察の手引きと，日本で普通にみられるゴールのリストがあり，45科98種類の植物があげられている．この数は寄主が研究されたものに限られているので，実際にはもっと多いだろう．本書の知識を身につけておけば，野外で「虫こぶだ…。」でおしまいにする前に，いくばくかの観察をつけ加えることができるので，自然に対する理解をより深めることができるだろう．野外でよく出会う食痕についても，こういう解説書がほしい．巻末に用語解説，参考文献，索引がついている．

（金井弘夫）

□西口親雄：**森のシナリオ，写真物語・森の生態系**　148 pp.　1996.　八坂書房．￥2,500.

森林動物を専攻した著者が，永年の演習林勤務の間にものした写真，スケッチ，観察記，エッセイである．図鑑や解説書ではなく，どの頁を開いてもよい．なにげなく目にする自然現象について，著者の蘊蓄を分けてもらえる．自然はそういう予備知識の有無で，たいそう違ったものに見えるものだ．書名よりずっとくだけた内容で，一般読者にも十分すすめられる本である．

（金井弘夫）

□岩槻邦男：**シダ植物の自然史**　259pp.　1996.　東京大学出版会．￥3,502.

定年をむかえた著者の研究回顧の書であるが，そこらの回顧録とはかなり様子がちがう．誰もが自分の足跡を肯定的に書くのは当然だが，そのときどきの自分や他人の業績が，ささいなことまで実に有機的に関連づけられ，強く言い切る口調で一貫しているので，まるでこれ以外にとる道は無かったと思わせるほどだ．著者がかかわったシダ植物について，フロラ，形態，生活史の研究からはじまって，最近の**DNA**による系統解析にいたるまで，世界の情勢も取り入れながら，「生きているとはどういうことか」（このことばは繰り返し登場する）を追求した過程がいきいきと描かれ